

乳幼児が椅子に座る行為を学習する過程 (1)

—— 姿勢を通じた文化的環境との関係性の発達 ——

The process by which infants learn to sit on a chair (1)

—— Development of physical postural relationships with the cultural environment ——

竹内伸宜*

要約

環境の中で自由に移動しつつ、同時に物に制約され包まれる存在としてある人間にとって、椅子という存在は居住環境(家具)とも道具ともみなすことのできる独特な性格をもっている。本研究では、人間の精神発達、とりわけ対物・対人的な関係の形成において、椅子が果たす役割について考察することを目的として、その知覚的特性、歴史・文化的な変遷、感覚運動的段階にある乳幼児にとっての認知上の制約、さらには椅子の上での活動に際しての姿勢保持の問題、異なる文化の下での椅子に座っての活動の位置づけについて、各分野の研究動向をふまえつつ、研究を進めるうえでの視点の整理を行った。それを通じて、乳幼児の椅子にたいするかかわりが対人的なかかわりと絡み合いつつ、座る行為へと導かれていく過程について、インタビューや観察記録で得られたデータ分析を行う上で留意すべき視点を確認した。

キーワード：道具使用、ユカ坐文化、イス坐文化、アフォーダンス、姿勢

1. はじめに

今日、我々は日々公共の場において、椅子というものを、ありふれた環境の一要素として、それに腰掛け、日常生活を営んでいる。しかしひとたび家庭に入ると、生活の場は床を基準とした、座る生活へと変化する文化をもまた共有している。竹内・上原・亀島(2001)は「文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達：その日中比較」の一環として、上海市内の託児所と大阪府内の保育所に通所する乳児(1～2歳児)と保育者について、施設内での自由遊び場面、設定場面、食事場面における観察を行った。同時に、上海の託児所においては養育環境に関する養育者へのアンケート(家族構成、託児理由、自宅の居住・養育空間、養育支援の情報源)も実施した。観察結果の分析において、観察セッション中に生じた視線と姿勢、発声の頻度から「椅子に座る」文化(上海)と「床に座る」文化(大阪)の違いが、保育者の視線の向け方の違いと関連していることが示唆された。またアンケート結果からは、保育者と養育者との関係を含む子育て支援シ

ステムの違いが示唆された。これらの結果より、感情制御行動の形成に各文化に特有の環境とそれの中での養育行動が影響を及ぼしていることが示唆された。本研究は、その成果を踏まえ、誕生した乳幼児が入り込む居住環境内のとりわけ椅子という、家具として、同時に活動に際しての道具として環境内に存在する対象物に着目し、乳幼児の対人・対物関係の発達において椅子が持つ意味について考察することを目的とする。

2. 環境との関係を媒介する道具としての椅子

人間は直立二足歩行によって手が自由になり、道具を使った活動が可能となった。身体移動とは異なる機能を有するようになった手によって、狩猟生活や採集生活においては、道具を利用した自然物の獲得が可能になった。一方、道具の製作については、脚を使った移動は必要としない。場所が固定され、座した姿勢で行われる集中力を要する活動であるといえる。

人種・民族を問わず、そのような作業において姿

* Nobuyoshi TAKEUCHI 聖和短期大学 教授

勢を維持する道具立てとして、一般に椅子といわれる道具が使用されてきた。民俗学の標本資料目録データベースを検索すれば、4本の脚をもつ椅子から、枕木の如く地面に敷かれた板切れまで、そのカテゴリーに属する世界各地から収集された「椅子」が多数表示される。後述するように和服の「帯」、袴の「腰版」や他の道具との接続を前提とした機（はた）の「腰当て」の様なものも、機能的にはそれに類するものと位置づけられる場合がある。本研究では、それらにも着目しつつ、家具として家屋の内外に固定的に配置された椅子に目を向けていくことにする。

Gibson (1979) の解釈に従えば、椅子は通常は床に固定的に設置されているという点で「付着対象 (attached object)」であり、また目的に応じて臨機応変に移動可能であるという点において「遊離対象 (detached object)」でもある。子どもの「成長や発達」という軸を据えて言い換えるならば、それは付着対象から、付着対象の属性を維持しながら遊離対象ともなっていく道具的存在である。

我々の生活の中では、椅子は「道具」として立ち現れるよりも、「環境」の一部として立ち現れてくる。しかしそれは決して「自然環境」ではなく同種の他個体によって設置されたものである。

生物個体が身体の外部に身体を支える環境を形作る試みは、他の生物においてもみられる。Dawkins (1982) の理論に基づき、生物がつくる体外構造が生物の身体構造とともに進化の過程で精緻に形づくられてきたという主張、すなわち「延長された表現型」としてのそれら体外構造を生物の表現型の「延長」と見る観点からの Turner (2002, 2011) 等の研究も存在する。

ゴカイの潜穴、蟻塚など昆虫の巣穴から、ビーバーの構築するダムに至るまで、巣作りによって、身体の周りにめぐらされた環境は、個体を包み込む構造物として、物理学的（力学的、音響学的、他）もしくは化学的（呼吸システムを維持する栄養成分等）に、身体を環境との有益な関係を維持し、遺伝的に伝えられる。しかし、ヒトが周囲に作り上げる環境は、少し異なった様相を帯びている。それは遺伝的に伝えられるものではない。

3. 文化的な環境の要素としての椅子

他の生物の場合、環境世界との絶えざる循環的な

相互作用のなかで築かれる外部構造の多くは遺伝的に獲得された本能的な行動としてその個体によって本能として実行され、構築される。人間の場合、椅子などの家具はそのような循環に外部から文化という形で、関与が行われる。すなわち、これらは当該個体により構築されるのではなく、個体はそれについて、当初から完成された椅子という存在として出会う。Lewin (1935) によって理解された、人間にとっての「場」の構造は「自然」ではなく「歴史・文化」を背負って構成されている。「環境世界 (Umwelt)」を提唱する Uexküll (1940) も、その環境世界の範囲内においてという条件のもと、以下のように述べている。

われわれ人間が動物に優っている点は、生来もっている人間の本性の広がりを広げることができるというところにある。なるほど人間は新しい器官を作ることはできないが、補助手段を与えることはできる。知覚道具も、作業道具も人間が作った。そしてそれを利用できる人間の一人一人に、その環境世界を深め広げる可能性を与えるのである。環境世界の範囲からはみ出すものは何一つない。

もちろんその成立においては、自然の環境との絶えざるかわりによって環境が構築され、洗練される歴史が存在する。類人に近い高度な社会的知性を持つ（藤田, 2009）と予想されるフサオマキザルの道具利用に関する研究（Visalberghi et al., 2009）において、作業の土台となる（金床的な役割を果たす）石を中心として、ヤシの実とそれを打ち割る石とが、その場所に運ばれてくる例がある。フサオマキザルは土台の石が置かれた作業場とヤシの実、および、ヤシの実と打ち砕く石との各々の関係を理解しつつ、作業環境を構築してきた歴史をもつ。生まれしてきた子ザルにとって、環境は所与のものとして立ち現れるが、成人ザルの洗練された道具利用を目の当たりにして、それを観察しつつ行為の様式を模倣することを通じた学習が行われることになる。後述する心的表象の度合いは人間と大きく異なることが分かっているが、ここに存在する環境世界は、サル文化と歴史を背負ったものであることに違いはない。

人間の場合においては、多様な生活活動を前提し

て、居住空間という構造化された道具立てが組み込まれた固定された空間が存在する。その仕様を確定し、構築し、運用するに際しては、集団内の大人世代の意識的活動が関与し、文化として伝えるべき内容（使用の様式）が存在する。

周産期の習慣と育児の道具、および子ども部屋にかかわる考察のなかで、生まれてきた子どもの入り込む生活環境について陳（2003）は以下のように述べる。

養育者としての大人はある特定の環境（地域、住居およびその中の家具や生活設備などの具体的な設定）に生活し子育てをする。子育ての環境として、あるいは少なくとも子どもがいる場所として、この特定の環境の設定は、養育者の子ども観、子育ての目的などの事柄と密接に関連する。

4. 椅子に座ることにかかわる行動発達と心理的過程

大人によって構成された環境の中に生まれ落ちた子どもは、そのような環境世界からの誘い掛けに応じて、かかわりを開始する。しかしながら、大人の道具イメージの世界で構築された椅子という物に立ち向かう乳幼児は、当初からそれを「座るもの」と位置付けて関与を開始するわけではない。即ち、椅子の機能の獲得は椅子が誘い掛けてくるのではない。更に付言するならば、椅子に座った状態で、その構造を活用しての円滑な行為の実現は、主体的で意識的な椅子利用の様式の獲得を前提する。

Выготский（1984）は、Lewin が1926年に紹介した幼児（Lewin の1歳7カ月の娘 Hannah）の「対象物に腰掛ける」行為にかかわる映像¹⁾を解釈するなかで、状況拘束性のもとで状況のなかの力学的部分として入り込むという「場の構造に専ら適合させた行動」をとる幼児にとって、椅子に座るという行為は「他にありうることの知識」を持ち込めない幼児には達成困難な極めて高度な活動であることを指摘している。ここでの石は Gibson（1979）の「アフォーダンス (affordance)」の由来となる

“Aufforderungscharakter（誘発性）”という「ある種の命令的な性格を獲得」した対象物として幼児の前に立ち現れるが、感覚運動的な対応の段階に留まる幼児はそれに座ることができない。Выготскийは石に両手をつきながら座ることなくその周囲を回転し続ける幼児の映像について以下のように記述し、解釈を行っている。

このようにして、子どもはもっぱら現在の状況に拘束されるのです。幼児期の子どもは、より年長の子どもと異なり、他にあり得ることについての知識をこの状況のなかに持ち込みません。（中略）

レヴィンは、二歳までの子どもにとっては、子どもの視界にない対象の上に腰掛けるという課題がどのような困難を引き起こすかを示す実験を記録しました。これは、大きな石を使った実験で、子どもはすべての側から石を一回りして、それをなでる等しました。それから子どもは座るために背を向けますが、背を向けたとたん、子どもは石を見失います。そこで子どもは石につかまって、座るために向きを変えます。最後に、一人の子どもが写真に撮られたのですが（これはレヴィンの本に引用されました。K. Levin, 1926）、ついに独自のやり方で困難を切り抜けました。かれは、ちょっとかがんで、石に背を向けて立ちながら、それを視野に置くために足の間からながめました。そうすると、かれは座ることに成功したのです。幾人かの子どもは、手を石にあてることによって、救われています。別の場合には、実験者自身が、子どもの手を石の上に置いて、子どもが自分自身の手の上に坐るようにしました。というのは、子どもには、かれが手でおおっている石の一部分の後ろに石全体があるという感覚がないからです。直感的な場による子どもの被拘束性は、おそらくこのような状況における子どもの意識特有の活動を示しています。

われわれ大人は椅子によじ登って座るのではなく、椅子面と身体との関係をイメージしつつ、逆方

1) 松野豊（2004）が翻訳紹介する Lewin と Выготский との交流関係についての Bluma Zeigarnik の回想インタビュー、および Vygotsky（2018）に、この映像に関する解説がある。なお本映像については“Lewin, Kurt. 1925, about. Field Forces as Impediments to a Performance. 09: 04 min.”というタイトルのアーカイブが存在する。

向を向いて、椅子を視野外においたまま着席する。その際、身体と椅子との関係は視覚的に確認されるのではなく、感覚運動行為の協応を可能にする表象世界での心内操作の媒介のもとで確認される。

Lewin の “Aufforderungscharakter” (「誘発性」) という用語から独自のアフォードانس (“affordance”) 概念をその後提起した Gibson (1979) は、その概念に基づいて、「もしも陸地の表面がほぼ水平 (傾斜しておらず) で、平坦 (凹凸がなく) で、十分な広がり (動物の大きさに対して) をもっていて、その材質が堅い (動物の体重に比して) ならば、その表面は支える (support) ことをアフォードする」と定義する。さらに、「先の4つの特性を備えた支えの面が、もし地面よりも膝の高さほど高ければ、その面はその上に坐ることをアフォードする。我々は一般にはそれを坐るもの (seat) とよぶ」と椅子の特性に言及し、さらに「子供にとっての膝の高さは、大人にとっての膝の高さとは同じではないので、そのアフォードانسは個々の人の背の高さと関係している。」と付け加えている。

しかしながら、「もし、ある面が水平で、平坦で、広がりがあり、堅くて、知覚者に対して膝の高さにあるならば、事実その面は坐れるものである。もしこれらの特性をまさに備えていると弁別されるならば、それは坐ることのできるものに見えるに違いない」と知覚次元での解釈を述べるにとどまり、Lewin の観察事例においてみられた幼児が〈石から「坐るもの」として坐る行為をアフォードされながらも、坐ることができずにそれに両手をついたまま石の周りを回転する行為〉を説明できる次元まで問題を具体的に説明はできていない。

ただし、別の箇所では Gibson は以下のように社会化という視点から行為の発達に関わる要件に言及している。

子供はまず最初に自分に対する、自分自身の行動に対する対象のもつアフォードانسを、知覚し始めることは疑いない。子供は自分自身の脚や身体や手との関係で歩いたり、坐ったり、掴んだりする。しかし、子供は、自分自身に対するアフォードانسだけでなく、他の人に対して対象がもつアフォードانسをも知覚することを学習しなければならない。(中略)

それぞれの子供が自分自身はもちろん、他の人にとって、対象がもっている価値をそれぞれの子供が知覚して初めて、子供は社会化しだすのである。

この「他の人にとって対象がもっている価値」にかかわる表象レベルでの操作が、すなわち、「異なった観察点で同じ立体の形を子供に知覚させることを可能にする不変項や、同じように、異なった観察点で2人以上の子供達に同一の形を知覚させることを可能にする不変項」を認知レベルで可能にすることで、椅子に座る行為が達成できることが説明されると考えられる。

5. 椅子に座っての姿勢維持と身体運動

椅子に座ろうとする行動から、座って後の行動に視点を移して考えると、座った状態での姿勢維持と世界との関りとしての身体運動が次に問題となってくる。世界を眺め、かつ新たな関わりとの関係がどのように実現しているのかという問題である。

上述したように「姿勢の維持」という機能については、矢田部 (2004, 2018) が述べているように、椅子に限定せず、広く袴の「腰板」や結城つむぎの織機である「居座機」の櫛の皮でできた「半円形に湾曲した腰当て」も、上体のあらゆる動きを支える「ラウンドバック (円形支持)」で作業道具と身体との安定した関係を維持する用具という意味においては、「椅子」に類するものとも考えることもできる。

椅子と姿勢維持および身体運動とのかわりについては、重度の肢体不自由者の「矯正」を目指して導入される椅子に、主体の自由度が算定された構造を持ち込むことで、障がい者が自ら動きの障がいを克服する契機となる事例が示唆を与えてくれる。「動きの障害は「姿勢ぎめの困難」として再定義される」と佐々木 (1990) が指摘するその事例として、野村 (2007a, 2007b) の報告が挙げられる。

野村・佐々木 (2007) の対談において野村は、Gibson が脊椎動物の5種類の知覚システムのうちの「大地と身体との関係を知覚するための『基礎定位のシステム』」としての姿勢を重視していることを指摘し、椅子作りが「定位の場を作り出す」ことであるという視点から、脳性麻痺の重い障がいをもつ子どもが安心して動き出せる場としての椅子を位置づけたシーティングセラピー (Seating Therapy)

と呼ばれるリハビリテーションを紹介している。我々の身体を支え運動の方向を決める骨はすべて関節によってつながっており、「この関節はブロックのように固定されたものではなく、足関節から顎関節に至るまで全て可動性でバランスをとりながらつながっている」(野村, 2007) という前提で、野村は以下のように説明する。

「身体の後ろ側の奥の筋肉は背骨にくっついていきます。視点とする骨があるから背中筋は収縮しやすい」。一方で、「腹側にある筋にはよりどころとなる骨がなく、しかも腹筋は長さの長い筋肉なので、機能的に収縮させることが難しい」。ここで腹筋をいかに働かせるかが姿勢定位の大きなポイントになっていく。使える背中筋で上体を起こし、手を使わせる訓練は姿勢保持に必要な体幹筋の働きに注目すれば、背中だけを過剰にはたらかせていて、発達させるべき腹筋の訓練にはなっていないことになる。このような理由から、「後ろもたれ」の姿勢すなわち「腹筋の長さを最適な長さに保つことのできる位置をキープする」ことで、筋肉を一定の長さに保たせ、「最適な状態に調整することで楽に起きることができ、まわりも見ることができ」ようになる。この状態を維持しつつ「楽にもたれた状態で手や首などを動かすことで、体軸の発達も同時に促されてくる」。そして、身体の歪みによって「浮いている」ところにサポートを入れながら「理想状態に固定するのではなくて、どちらかという活動に導く」方向でリハビリを行う。

佐々木 (1990) が『姿勢』は静止ではなく『動き』の根源的な単位として、物理的に一義的に定義できるものではなく、環境の状態と緊密なインターアクションが決定するものとしてとらえられている」と指摘するように、椅子は身体を固定するのではなく、矢田部 (2004) の櫂の腰当て事例について上述した、活動において身体を動かす軸を椅子によって見出す、という機能が託されていることがここにおいても確認できる。

身体の姿勢をある一定の範囲に固定することで、何が可能になっていくのか、人間はどのようにそれを学習し、活用することで、その姿勢での様々な生活活動を展開し、有効に活動できる環境を創出しているのか。とりわけ乳幼児期におけるその説明が必要とされる。

6. イス坐とユカ坐という居住文化とその変遷

本研究においては、椅子に座る事を通じて、どのような活動において、何(人あるいは物)に対してどのような姿勢で臨み、どのような関係が可能または優勢になるのかという点に目を向けている。それを理解するには、どのような文化的背景を持つ居住環境の下で椅子に座る行為が要請されるかという点も含め考察することが必要になる。

今回、「椅子に座る」行為に着目するに至る経緯については、中国の「椅子に座る」文化と日本の「床に座る」文化という対比を本論冒頭において述べた。勿論、歴史において両文化は当初からそのような「道具立ての対比」で表現できる文化として各々存在したわけではない。

山折 (1981) によれば、漢の時代に「胡牀(こしょう)」という携帯用の床几が用いられ、「倚坐(いざ)」すなわち将棋や腰掛のようなものに倚って座るようになるまでは、古代の中国人は「坐または尻、跪、居、箕踞(ききょ)」の四種の坐法あるいは「牀」や「榻(とう)」の上に「平坐」(「地に坐る」)の姿勢で座っていた、と述べられている。

「坐」または「尻」は正坐を意味し、「居」は「蹲踞」、「箕踞」は両脚を前に伸ばして座る方法である。一方で、「牀」や「榻」はその上に座ったり横臥するしたりするため、一定の場所に固定された家具を指す。石丸・石村 (2004) はこれら「中国古典様式家具の坐臥具が、和様化して日本の室内構成要素や家具に影響している」ことを確認しているが、これはすなわち、中国の「立つ」文化の中での坐臥具が、日本の「坐る」文化の(家具ではなく)部屋の床一面もしくは一段高い「床の間」や、「土間から床に上がる踏み段」へと変化していった事例であるという見方をすれば、日常活動を「椅子から立つ」ことで行う文化と「床に座る」ことで行う文化の違いは形態を変化させつつも保持されていることが想定できる。

ユカ坐文化にイス坐文化が入り込んできた日本において椅子を介した活動を理解していくためには、ユカ坐文化に、イス坐文化がどのように入り込んできたかについて、確認しておくことが必要である。またそこで、視線の高さが議論の項目に入っていることにも目を向ける必要がある。

日本におけるユカ坐からイス坐への移行という、開国以降の近代化の中で追求されてきた志向は、国家主導であったとしても、椅子という家具の導入だけがその課題であったのではない²⁾。沢田(1995)が、戦後の「住まい様式の創造」を展望して出版された西山(1947)の『これからのすまい』において、ユカ坐からイス坐への移行に際して「後ろ髪を引っぱっているもの」として「家具の問題」、「暖房の問題」、「衣服の問題」、「上足の問題」が挙げられていることに言及しているように、生活水準と伝統的な衣と住の文化から由来するところの種々の事情がそこに折り重なって問題となっていることがわかる。

沢田は西山の提示した「新しい起居様式の型」として、可能性としての以下の戦後の「三つの行き方」を紹介している。

- ①二重生活の完全な清算のあとに来る完成された起居様式を洋風イスザ生活と考え、この完成された形をそのまま実現しようとする行き方。
- ②イスザとユカザを内面的に融合させようとしてつより接近させたものであり、ユカザ生活を残し、住宅の一部のユカをイスザの坐高だけ高くし、そこにユカザ生活を残し、同じ住まい空間のうちに両様式を統一して新しい起居様式を生み出そうとする行き方。
- ③一般に広く多くの人々が止むを得ず実行しているもっと手っ取り早い行き方。それはとりあえずイスザ生活を従来の住宅の中に必要の最小限度だけ持ち込んで、ユカザ生活の耐え難い窮屈さと非能率、不愉快を避けようとする行き方。例えば学生の下宿住まいの様式であり、上足のユカ面に坐り、そこに寝る。そしてそこへ同時に椅子も腰掛机もおく、という方法である。ユカザ生活を基調とし、とりあえず体勢と起居、家内作業に必要な程度の極く少ない支持家具を導入し歪められた「ユカザ生活」を改善していくやり方。ここでは当分は寝床形式をそのままとし、休息と作業用の支持家具として必要な椅子、机だけを取り入れていく形である。

そしてこの第三の行き方、すなわち西山が「最も素朴で一目ブザマに見え又調和の失われている様に

感じられる第三の行き方が、国民的な住まい様式の改革として最も現実性があり、かつ含蓄のある行き方だと考える」と結論付けた第三の行き方が、「さまざまな姿でくつろぐ今日のだんらん場面そのものであることに驚きを覚える」と沢田が述べているように、西山の提起した提言が現代の日本国内における標準形を予測していたことが確認できる。

西山(1947)はそこで、この第三の行き方にかかわって、坐の姿勢について以下のように提案している。

座る姿勢としてはイス坐が主体となるが、一部分にユカ坐が残ることを認めねばならない。この場合所謂「正座」が残るかどうかは問題である。正座は明に不自然な姿勢である。昔の「ねまる」(引用者注：東北地方の方言で「黙座する」の意)楽座様式が主となるべきものと思う。婦人の坐り方については従来の考えからすればこの方式は大いに問題となる。併し現在の着流しの和服様式がズボン式或はスカート式に変わると、婦人も強いて正座を死守する必要がなくなる。楽坐とまでは行かなくとも、立て膝の様な坐り方が可笑しくなっていない。

また視線の高さについて、西山(2018)は「目の高さの統一にたよって両者を折衷しようとした藤井厚二教授の主張(引用者注：上記「第二の行き方」に該当)はさらに規模の拡大を要求する。これに対して目の高さへのこだわりは封建的身分制度に結びついたもので、将来そういうものにこだわらないイスザとユカザの融合が生まれるべきだと展望している」とこの当時の議論を解説している。来客をユカ坐に座らせて、家人がイス坐で応対することの違和感が現代においても残っているとすれば、その葛藤は生きていることになる。

明治、大正、昭和を通じて、イス坐文化は日本文化の中に徐々に定着していった。昭和初期から後期にかけて、ユカ坐文化の中で育つ子どもは、座ることに関わる「しつけ」を通じて、とりわけ卓袱台を前にして座る行為に関する厳格な規範を要求されてきた。一方で、学習環境においては学校及び家庭で

2) 開国当時の日本の家屋については Morse (1886) が詳しい。

の机といすの生活は定着してきたとはいえその規範についてはユカ坐のしつけに比較して明確な様式は見いだされなかった。沢田は以下のように指摘する。

あいさつにしろ、会話にしろ、儀式にしろ、人と人とがコミュニケーションする場面での姿勢は、互いの意思表示の有力な手段になる。姿勢は身体符号として、人間生活にとって重要な意味をもっている。したがって、そうした場面での人間の立ち居ふるまいを洗練させるために、欧米では、イスに腰掛けるときの姿勢についても幼少期からごく自然にしつけが行なわれているし、美しいイス坐の立ち居ふるまいについての規範も存在している。(中略)

一方、日本の住宅におけるイス坐を振り返ってみると、生活改善の目標として注目したのは、合理的で健康的な生活を可能にする意味でのイス坐の利点であった。儀礼的なイス坐やイス坐の規範については、注目されないまま進むことになった。

ここでいう規範は単なる行儀良さという意味ではなく、基本的な人間関係のとり方の様式と捉えるならば、和洋の様式を問わず、食卓に乳幼児用の椅子が一般的に持ち込まれている一方で、家屋や室内の家具配置の様子がユカ坐主体でありつつも各家庭でまちまちである現状において「混乱」が生じるのは当然と云え、現状を把握する調査研究において留意すべき点であると考えられる。

7. 椅子をめぐる姿勢と視線に関する比較文化的視点

前節で述べた日本固有の住宅様式とそこでの椅子利用の様式を浮き彫りにする上で、比較文化的に日本の養育・保育環境を見つめなおすことは、有益な視点を提供するものと考えられる。上海と大阪における比較研究(竹内他, 2001; 竹内, 2003)で観察された保育場面に立ち戻って考えるならば、発達の途上で、床から立ち上がって、歩行を開始するというプロセスの中で椅子に出会うことにおいては上海・大阪とも同様の方向性をもっている。しかしながら、同じ椅子が置かれているとはいえ、それぞれの文化を背負った空間構成において、その物理的配

置とそれにかかわって乳幼児に対してとられる、保育場面での乳幼児の身体の姿勢に関わる行為の導き方には幾分の違いがあることを、観察場面とした二つの保育施設で確認することができた。

例えば、部屋内の物の配置については、大阪の場合は壁面構成以外は頭上には電灯以外の物は配置されていないのに比して、上海においては乳児向けの注意を惹く飾りつけがなされ、保育の場面においてもそれを見上げる声掛けが時折なされたりする。大阪の保育所においては、保育室の床面は全て靴を脱いだ形で活動できるのに比して、上海においては歩行以前の乳児がユカ坐の姿勢で活動できる区画は柵で囲われ、歩行を開始した幼児クラスの場合、柵は取り払われてはいるが、ユカ坐の姿勢で玩具等で遊べる絨毯面の区画では靴を脱ぐことが促されるが、そこ以外のフローリングの区画に出る際には靴を履くことが促されるという形で、同じ保育室内において二つの領域が異なった姿勢を取ることが厳格に守られている。さらに上海の乳児については、この二つの区画について、月齢に応じてフローリングでの活動には歩行器を利用することが課せられ、二つの区画で全く別の姿勢で活動するよう方向づけられていた。床面は特別な区画以外は座ることのできない領域として、姿勢の調整がなされており、大阪の乳幼児にとっては床面に座ることも椅子に座ることも共に落ち着く場であるのに対して、上海の乳幼児にとっては特別な区画を除き、落ち着く場は椅子の座面の上のみということになる。

乳幼児にとっての生活上での椅子の位置づけは、このように文化によってかなり異なる様相を呈していることがわかる。

8. まとめ

本研究では、姿勢と視線を一定の方向に保持することで、手を用いた微細な対象物の操作を可能にし、対人的な関係を維持する有効な場を提供する椅子という存在について、多方面からの研究視点を交差させつつ考察を行った。そこから、乳幼児の椅子にたいするかわりかは、居住環境を含む物的な環境と、そこに既存の文化の体現者として存在する大人からの直接・間接の関与を通じてその行為の様式が形づくられていくことが示唆された。椅子と出会う瞬間から、座る行為へと導かれていく過程について、今後インタビューや観察記録の資料を分析し、

考察するにあたってのいくつかの軸となる視点が浮き彫りにできたものとする。

9. 引用文献

- Выготский, Л. С. (1984) *Собрание сочинений*. т. 4, М., Педагогика ヴィゴツキー, L. S., 柴田義松・宮坂淑子・土井捷三・神谷栄司訳 (2002) 児童心理学の諸問題 新児童心理学講義 新読書社
- 陳省仁 (2003) 物を与える・奪う：物と身体を媒介する相互交渉と意識の貸与 根ヶ山光一・川野健治編著 身体から発達を問う：衣食住のなかのからだところ 新曜社 pp.73-91.
- Dawkins, R. (1982) *The extended phenotype: the long reach of the gene*. Oxford University Press. リチャード・ドーキンス著 日高敏隆, 遠藤彰, 遠藤知二訳 (1987) 延長された表現型—自然淘汰の単位としての遺伝子 紀伊国屋書店
- 藤田和生 (2009) フサオマキザルの社会的知性 動物心理学研究 59(1), pp.117-130.
- Gibson, J. J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company. ギブソン, J. J. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳 (1985) ギブソン生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る. サイエンス社
- 石丸進・石村真一 (2004) 中国古典様式家具の日本への影響に関する研究：坐臥具の牀・榻・凳を中心として デザイン学研究 51巻3号 pp.1-10.
- Lewin, K (1935) *A Dynamic theory of Personality: selected papers*. レヴィン, K. 相良守次・小川隆訳 パーソナリティーの力学説 岩波書店
- 松野豊 (2004) クルト・レヴィンとソビエト心理学 心理科学第24巻第2号 pp.70-89.
- Morse, E. S. (1886) *Japanese Homes and Their Surroundings*. Massachusetts: Salem University Press, モース, E. S., 斎藤正二・藤本周一訳 (2000) 日本人の住まい 八坂書房
- 西山卯三 (1947) これからのすまい：住様式の話 相模書房
- 西山卯三 (1989) すまい考今学：現代日本住宅史 彰国社
- 野村寿子・佐々木正人 (2007) インタビュー 世界とつながる椅子—シーティングセラピー— 佐々木正人編 (2007) 包まれるヒト：(環境)の存在論 岩波書店 pp.31-46.
- 野村寿子 (2007) 知覚と行為の始まりを作る：自ら発達する力を育むシーティングセラピー 現代思想 第35巻第6号 pp.115-123.
- 佐々木正人 (1990) 姿勢が変わるとき 佐々木正人編 アクティブマインド：人間は動きのなかで考える 東京大学出版会 pp.87-109.
- 沢田知子 (1995) ユカ坐・イス坐：起居様式にみる日本住宅のインテリア史 住まいの図書館出版局
- 竹内伸宜・上原明子・亀島信也 (2001) 保育者のかかわりの様式と乳幼児の発達：上海と大阪の保育施設における行動の文化比較 平成10～12年度科学研究費補助金 (基盤研究(A)(2)(海外)) 文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達：その日中比較 研究成果報告書 (課題番号：10041040) pp.69-78.
- 竹内伸宜 (2003) 保育場面における姿勢と視線および養育支援環境：上海と大阪の保育施設における行動の文化比較を通して 神戸海星女子学院大学研究紀要第41号 pp.111-120.
- 竹内伸宜 (2011) 乳幼児が家具および家族との間で形成する関係の発達—イスに座る行為をめぐって— 発達心理学会第22回大会発表論文集 p.513
- Turner, J. S. (2002) *The Extended Organism: The Physiology of Animal-Built Structures*. J・スコット・ターナー著, 深津武馬監修, 滋賀陽子訳 (2007) 生物がつくる〈体外〉構造：延長された表現型の生理学 みすず書房
- Turner, J. S. (2011) Termites as models of swarm cognition. *Swarm Intell* (2011) 5: pp.19-43.
- Uexküll, J. von (1940) *Bedeutungslehre* (=Bios, Abhandlungen zur theoretischen Biologie und ihrer Geschichte sowie zur Philosophie der organischen Naturwissenschaften. Bd. 10). Leipzig: Verlag von J. A. Barth. ユクスキュル, J. von・クリサート, G. 日高敏隆・野田保之訳 (1973) 生物から見た世界 (第2部「意味の理論」) 思索社
- Visalberghi, E., Spagnoletti, N., Ramos da Silva, E. D., Andrade F. R. D., Ottoni, E., Izar, P. & Fragaszy, D. (2009) Distribution of potential suitable hammers and transport of hammer tools and nuts by wild capuchin monkeys. *Primates* Vol. 50, pp.95-104.
- Vygotsky, L. S. (2018) *Vygotsky's Notebooks: A Selection*. (Zavershneva, E. & van der Veer, R. (Eds.)). Singapore: Springer.
- 山折哲雄 (1981) 「坐」の文化論 俊成出版社
- 矢田部英正 (2004) 「椅子と日本人のからだ」 晶文社
- 矢田部英正 (2018) 座の文化論：人はどのようにすわってきたか 晶文社